

REPORT | まち全体が MICE 会場。

第 7 回サステナブル・ブランド国際会議 2023 東京・丸の内を開催



東京・丸の内エリアをまるごと会場に――。DMO 東京丸の内はこのようなコンセプトを掲げ、「第 7 回サステナブル・ブランド国際会議 2023 東京・丸の内」(SB 国際会議)を誘致し、2023 年 2 月 14 日～15 日に開催しました。昨年の第 6 回までは、六本木、お台場、横浜が会場で、丸の内での開催は今回が初となります。参加者は延べ 5,212 名と過去最高を記録し、丸の内のまち全体に賑わいがもたらされました。

●「SB 国際会議でまちが一色に」

今回の SB 国際会議の大きな特徴は、1 つの施設だけではなく、まち全体に会場を散りばめた“都心型エリア MICE”を採用したことです。メインのセッションプログラムは、①東京国際フォーラム、②JP タワーホール&カンファレンス、③丸ビルホールの 3 会場で実施。加えて、SB 国際会議の参加者以外にも自由に参加できる「Sustainable Brands OPEN SEMINAR & EXHIBITION」は丸の内仲通りと大名小路沿いに 6 会場、15 日夜に参加者の懇親会の場としてセッティングした「SB BoF (Birds Of A Feather)」は丸の内エリアの飲食店を中心に 5 会場を用意し、まさに“まちをまるごと”活用した丸の内ならではの MICE となりました。



SB 国際会議の MAP。青のアルファベットが OPEN SEMINAR & EXHIBITION、緑の算用数字が BoF の会場



メインセッションが行われた東京国際フォーラム（左）・JP タワーホール&カンファレンス（右）

2月13日夜には、キックオフパーティー「SB Tokyo Pre Night」をパレスホテル東京で開催。SB 国際会議のスピーカー、スポンサー、メディアパートナーなど総勢 204 名の方々が参加し、今回の盛り上がり予感させる楽しく充実の招待制ネットワーキングイベントとなりました。その壇上で、DMO 東京丸の内の藤井宏章事務局長は開催地を代表し挨拶しました。

「DMO 東京丸の内ではビジネス・カンファレンスを施設の中にとどめることなく、まち全体で展開していただく支援をしています。会場がまち中に点在し、この2日間はSB 国際会議でまちが一色になります。リアルなカンファレンスでの出会い、刺激、体験などが、地域・社会課題を解決し、新たなビジネスを生み出す原動力になると感じ、『参加して良かったね』

と言っていただけるように、微力ですがご支援させていただきます。充実のプログラムはもちろんですが、空き時間には日々、進化している丸の内を楽しんでいただければと思います」



上・Pre Nightの様子。下・パレスホテル東京での Pre Nightをはじめ、メイン会場である国際フォーラムでの飲食を担当した帝国ホテル東京やエリア内にある複数の飲食店等と連携して会議期間を通じ、持続可能な食の世界的キャンペーン「ONE PLANET PLATE」に基づく“サステナブルな料理”を随所で提供しました

会場のみならず、SB 国際会議の機運を盛り上げる工夫をまち中にも取り入れました。1 つは、丸の内仲通りを中心に計 55 か所に掲出したイベントフラッグです。「SB 2023 TOKYO MARUNOUCHI」とプリントされたカラフルで目を引くデザインのフラッグが風にはためき、行き交う人たちに SB 国際会議の開催を周知しました。また、フラッグは大丸有エリアマネジメント協会（Ligare）が立ち上げたアップサイクルブランド「Ligaretta」の素材として活用する予定です。廃棄量を減らすだけでなく、サステナブル・ブランド国際会議の物語が沁み込んだ素材をつなぎ、循環させていきます。そのほか、大丸有エリアに SB 国際会議を告知する横型モニタービジョンを計 80 か所、縦型モニターサイネージを計 28 か所に設置。丸の内仲通りに置かれているアーバンテラスのテーブルが 4 種類 10 か所で SB 国際会議仕様にラッピングされたほか、会期にあわせサステナブル仕様のキッチンカーともコラボレーションするなど、街のいたるところで SB 国際会議との連携がみられました。



左・サステナブル仕様のキッチンカー。右・SB 国際会議仕様にラッピングされたアーバンテラスのテーブル



左・丸の内仲通り沿いの Happ.に設置されたインフォメーションカウンター

右・丸ビルエントランスの大型サイネージにも表示



左・丸の内仲通りに掲出したイベントフラッグ。右・SB 国際会議を周知する縦型モニターサイネージ

●行動変容のきっかけ「OPEN SEMINAR」

「SB 国際会議の開催を通じ、地域に貢献してレガシーを残す必要もあります。そのため、サステナビリティに関して丸の内働く人たちの行動変容を促し、SB 国際会議のコミュニティに新しい層を呼び込むきっかけを作ること求められます。それを実現できるのが、丸の内だと思います」。今回の SB 国際会議をこう振り返るのは、主催者である㈱博展の鈴木紳介執行役員 CSuO（Chief Sustainability Officer／最高サステナビリティ責任者）です。

その“きっかけ作り”として、今回の SB 国際会議で初めて導入したのが、「Sustainable Brands OPEN SEMINAR & EXHIBITION」です。OPEN SEMINAR は、▽エネルギー×サステナビリティ▽アート×ビジネス▽フード×サステナビリティ▽メタバース×地方創生ーなどをテーマに、第一線で活躍する方をゲストに全 8 セッションを無料で誰でも参加できる形で実施。丸の内のオフィスワーカーが気軽に足を運べるよう、ランチタイムや夕方に開催したほか、参加者は SB 国際会議のスポンサーなどがブースを出展する交流エリア「Activation Hub」に 15 日午後、無料で入れる特典を提供するなどしました。OPEN SEMINAR に参加した 209 名のうち約 25%の方がその後に SB 国際会議にも足を運び、まさに「行動変容を促し、新しい層を呼び込むきっかけ」の場となりました。



左・OPEN SEMINAR の様子。右・丸の内オアゾにある書店「丸善 丸の内本店」とも連携し、SDGs 関連の書棚を特設していただきました。

一方、EXHIBITION として丸の内仲通りにある GOOD DESIGN Marunouchi で 2 月 3 日～15 日に入場無料で開いた企画展「循環のレシピーサーキュラープロダクトデザインの現在地」も大盛況。バイオマスポリエチレンを原料に 3D プリンターで作った家具や、不要なカシミヤを新たなカシミヤ製品にする取り組みなどを紹介する展示に、計 1,379 名の方が来場しました。参加者のアンケートでは、「満足」58%、「大変満足」40.2%と、多くの来場者に満足いただけた企画となりました。



大盛況だった GOOD DESIGN Marunouchi での企画展
「循環のレシピーサーキュラープロダクトデザインの現在地」

●参加者の打ち上げは“理想的なシーン”

もう 1 つ、今回の SB 国際会議で初めて企画した BoF も参加者の満足度を高めました。「環境&生物多様性」「次世代共創」「地方創生」など 6 つのテーマを設定して 15 日夜、丸の内エリアの飲食店など 5 会場で開催。参加者同士が食べたり飲んだりしながらネットワークを広げ、コミュニティイベントである SB 国際会議の価値をさらに高める新企画となりました。鈴木氏は「欧米のカンファレンスでやられていることを具現化できた面もあります。参加者が打ち上げをしているシーンというのは、コミュニティイベントとしてすごく理想的な終わり方だと思いました」と話します。



飲食店などで開いた BoF。コミュニティイベントらしく、参加者同士のネットワークが広がる場となりました

SB 国際会議というビッグイベントが丸の内のまち全体に染み出し、サステナビリティが丸の内、引いては東京、世界に伝播する一。こんな期待を胸に抱きたくるような「第7回サステナブル・ブランド国際会議 2023 東京・丸の内」となりました。これからも丸の内エリアの魅力を存分に活かした取り組みにチャレンジしていきます。